

持続可能な開発のための教育円卓会議

平成29年1月17日（火）

持続可能な開発のための教育円卓会議 第2回

1. 開催日時 平成29年1月17日(火) 14:00~16:00
2. 開催場所 金融庁 中央合同庁舎7号館 9階 共用会議室1(903)

3. 出席者

及川 幸彦 議長
重 政子 氏(阿部委員代理)
飯田 貴也 委員
池田 三知子 委員
今井 清 委員
小川 雅由 委員
上條 直美 委員
川上 千春 委員
川嶋 直 委員
川村 雄司 委員
佐藤 真久 委員
篠塚 肇 委員
柴尾 智子 委員
林 浩二 氏(諏訪委員代理)
辰野 まどか 委員
棚橋 乾 委員
塚本 直也 委員
手島 利夫 委員
仁科 俊彦 委員
安田 昌則 委員

環境省

総合環境政策局長

総合環境政策局環境教育推進室長

総合環境政策局環境教育推進室室長補佐

文部科学省

国際統括官

国際戦略企画官

国際統括官補佐

4. 議 事

1 開会

2 議題

1. ESDに関連する最近の取組について（報告）

- ① ユネスコ／日本ESD賞について
- ② ESD推進ネットワークについて
- ③ 関係省庁の取組について
- ④ 持続可能な開発目標（SDGs）の推進について

2. ESDに関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）後を見据えた取組及びGAPレビューフォーラムについて

3. その他

3 閉会

5. 配付資料

資料1-①-1 ユネスコ／日本ESD賞について

資料1-①-2 岡山ESDプロジェクトについて

資料1-①-3 岡山ESDフォーラム2017について

資料1-② ESD推進ネットワークについて

資料1-③-1 平成28年度 文部科学省ESD関係事業の実施状況について

資料1-③-2 平成28年度 環境省ESD関係事業の実施状況について

資料1-③-3 平成29年度 文部科学省ESD関係予算（案）について

資料1-③-4 平成29年度 環境省ESD関係予算（案）について

資料1-④-1 持続可能な開発目標（SDGs）実施指針（概要）

資料1-④-2 持続可能な開発目標（SDGs）実施指針（本文）

- 資料1-④-3 持続可能な開発目標（SDGs）実施指針（付表）
- 資料2-1 GAP後を見据えたESDの取組についての論点（例）
- 資料2-2 ESDに関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）
レビューフォーラムについて
- 資料2-3 日本におけるESDに関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）の下でのESDの取組（ESDの実施状況に関するフォローアップ結果から見えるESDの傾向）（案）
- 参考1 持続可能な開発のための教育円卓会議の開催について
- 参考2 我が国における「ESDに関するグローバル・アクション・プログラム」
実施計画

- 及川議長 皆さん、こんにちは。本日は御多用のところ、お集まりいただきまして、大変ありがとうございます。

それでは、定刻になりましたので、ただいまから持続可能な開発のための教育円卓会議を開始したいと思います。

初めに、人事異動がございましたので、事務局から御紹介をお願いします。

- 鈴木国際統括官補佐 失礼いたします。文部科学省でございますが、文部科学省で、森本浩一国際統括官が6月に着任いたしております。
- 森本国際統括官 よろしく願いいたします。
- 及川議長 よろしく申し上げます。
- 池田環境教育推進室長補佐 環境省でございます。環境省におきましては、総合環境政策局長として、奥主、環境教育推進室長として、永見が、それぞれ着任しております。
- 奥主総合環境政策局長 奥主でございます。よろしく願いいたします。
- 永見環境教育推進室長 永見です。よろしく申し上げます。
- 及川議長 ありがとうございます。続きまして、事務局、文部科学省、森本国際統括官より御挨拶を頂きます。お願いします。
- 森本国際統括官 ありがとうございます。私、着任が昨年6月でございますが、それ以降、このESDにつきましても、大きな進展が幾つかございました。それで、先生方のおかげをもちまして、ユネスコスクールにつきましても、1,000校を超える様々なステークホルダーの皆様方、全国で本当に熱心に活動を展開していただいております、先日開かれました全国大会でも、非常に活発な御議論を頂きました。分科会に分かれて、多様な活動を越えたものが、大きく実を結びつつあるのかなということ、改めて実感した次第でございます。

これを更に普及・発展させていくために、学習指導要領の体系の中に、どのように盛り込んでいくかということもございまして、具体的な実践のやり方の推進の手引も策定したりして、こういう普及・展開を、今、努力をしているところでございます。

ESDの10年間の成果を踏まえて、グローバル・アクション・プログラムが開始されまして、後ほど御説明がございまして、今年カナダで3月に、レビューフォーラムもございまして、こういったところで、日本として、どのように発信をしていくかという

ことが、重要な課題になっております。

海外におきましても、一昨年9月に国連のサミットにおきまして、2030年のアジェンダ、持続可能な開発目標、SDGsが採択をされました。この大きな全世界的な目標に向けて、どういうふうに参加していくのか。ESDという教育分野はもとよりなんですけれども、それを超えて、SDGsの17の目標にどういうふうに参加していくかということが、今、大きな課題になっております。

これが政府全体として取り組むということで、様々な実施指針を策定したりしておりますけれども、こういう持続可能な社会の構築への貢献も、非常に重要な課題だと思っております。

こういう形で、日本の取組が世界的にも評価され、岡山の取組はユネスコ／日本ESD賞も頂きまして、こういったことも、世界の模範として、事例がほかの方たちに参考にしていただけるようなレベルまで来ているということでございます。正に日本が世界をリードしていける分野ではないかと考えておりますので、是非、このトレンドを発展させ、進化させていきたいと考えておりますので、是非、先生方に活発な御議論を頂きまして、御意見、アイデアを頂ければと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

- 及川議長 ありがとうございます。

続きまして、環境省、奥主総合環境政策局長より、御挨拶を頂戴いたします。よろしく申し上げます。

- 奥主総合環境政策局長 環境省総合環境政策局長の奥主でございます。皆様におかれましては、平素それぞれのお立場からESDを推進いただき、誠にありがとうございます。本日は、日本におけるESDに関するグローバル・アクション・プログラムの下で、それぞれの自治体が行うESDの取組状況を御報告させていただくほか、それを踏まえまして、持続可能な開発目標、SDGsとの関連など、アクション・プログラムを見据えましてESDの在り方について、御議論いただくことと聞いております。

環境省といたしましても、アクション・プログラムの後を見据えまして取組を推進しているところであります。その柱といたしましては、多様な主体による分野・地域横断的な取組を推進するため、文部科学省との連携によりまして、ESD推進ネットワークを構築しているところでございます。

具体的には、ネットワークの全国的なハブ機能を担う体制といたしまして、昨年4月

に、ESD活動支援センターを開設しました。また今後、今年7月を目途といたしまして、全国8か所で、広域的なハブ機能を担う地方ESD活動支援センターを開設することとしております。

地方センターの開設は、現在、準備段階であります。今後、様々な課題に関わる方々が、このESD推進ネットワークにご参加いただけるよう、関係府省庁の協力も得ながら、呼び掛けを行ってまいりたいと考えております。

本日は、皆様方からの忌憚のない御意見を頂戴いたしまして、今後のESDの推進の参考にさせていただきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

- 及川議長 ありがとうございます。それでは、昨年の会議開催以降、新たにメンバーになられた方もいらっしゃいますので、改めて事務局よりメンバーの皆様の御紹介をお願いします。
- 鈴木国際統括官補佐 御紹介を申し上げます。委員名簿の順番で御紹介をさせていただきます。

阿部治委員、持続可能な開発のための教育の10年推進会議代表理事、立教大学教授でいらっしゃいますが、本日、御欠席でして、重政子、ESD - J代表理事に御出席を頂いております。

- 重委員代理 よろしくお申し上げます。
- 鈴木国際統括官補佐 飯田貴也委員、特定非営利活動法人新宿環境活動ネット、こども国連環境会議推進協会経営企画委員でいらっしゃいます。
- 飯田委員 よろしくお申し上げます。
- 鈴木国際統括官補佐 池田三知子委員、日本経済団体連合会環境エネルギー本部部長でいらっしゃいます。
- 池田委員 池田でございます。よろしくお申し上げます。
- 鈴木国際統括官補佐 今井清委員、愛知県立豊田東高等学校長でいらっしゃいます。
- 今井委員 よろしくお申し上げます。
- 鈴木国際統括官補佐 及川幸彦委員、東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センター主幹研究員でいらっしゃいます。
- 及川議長 よろしくお申し上げます。
- 鈴木国際統括官補佐 小川雅由委員、特定非営利活動法人こども環境活動支援協会理事でいらっしゃいます。

- 小川委員 よろしくお願ひします。
- 鈴木国際統括官補佐 上條直美委員、特定非営利活動法人開発教育協会代表理事でいらっしやいます。
- 上條委員 上條です。よろしくお願ひいたします。
- 鈴木国際統括官補佐 加藤久雄委員、奈良教育大学学長でいらっしやいますが、本日は御欠席でございます。

川上千春委員、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟事務局長でいらっしやいます。

- 川上委員 川上でございます。よろしくお願ひいたします。
- 鈴木国際統括官補佐 川嶋直委員、公益社団法人日本環境教育フォーラム理事長でいらっしやいます。
- 川嶋委員 川嶋です。よろしくお願ひいたします。
- 鈴木国際統括官補佐 川村雄司委員、愛知県環境部環境活動推進課長でいらっしやいます。
- 川村委員 よろしくお願ひいたします。
- 鈴木国際統括官補佐 佐藤真久委員、東京都市大学教授でいらっしやいます。
- 佐藤委員 佐藤です。よろしくお願ひいたします。
- 鈴木国際統括官補佐 篠塚肇委員、公益社団法人経済同友会総務部長でいらっしやいますが、ちょっと遅れておられるようでございます。

柴尾智子委員、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターシニアアドバイザーでいらっしやいます。

- 柴尾委員 柴尾です。どうぞよろしくお願ひいたします。
- 鈴木国際統括官補佐 諏訪哲郎委員、学習院大学文学部教授、日本環境教育学会会長でいらっしやいますが、本日御欠席のため、代理で、林浩二日本環境教育学会常任理事にお越しいただいております。
- 林委員代理 林です。よろしくお願ひします。
- 鈴木国際統括官補佐 辰野まどか委員でいらっしやいます。一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）事務局長でいらっしやいます。
- 辰野委員 辰野です。よろしくお願ひいたします。
- 鈴木国際統括官補佐 棚橋乾委員、多摩市立連光寺小学校長でいらっしやいます。
- 棚橋委員 棚橋です。よろしくお願ひします。

- 鈴木国際統括官補佐 塚本直也委員、国際連合大学サステナビリティ高等研究所プロジェクトディレクターでいらっしゃいます。
- 塚本委員 塚本です。どうぞよろしくお願いいたします。
- 鈴木国際統括官補佐 手島利夫委員、江東区立八名川小学校長でいらっしゃいます。
- 手島委員 よろしくお願ひします。
- 鈴木国際統括官補佐 枋原克彦委員、日本商工会議所理事企画調査部長でいらっしゃいますが、本日は御欠席でございます。

仁科俊彦委員、岡山市市民協働局ESD推進課長でいらっしゃいます。

- 仁科委員 どうぞよろしくお願いいたします。
- 鈴木国際統括官補佐 安田昌則委員、大牟田市教育委員会教育長でいらっしゃいます。
- 安田委員 よろしくお願ひします。
- 鈴木国際統括官補佐 以上です。
- 及川議長 ありがとうございます。それでは、引き続き、本日の配付資料につきまして、事務局より確認をお願いします。
- 鈴木国際統括官補佐 本日の配付資料でございますけれども、議事次第のとおりとなっております。一つ一つ、この場で御確認を頂くことはいたしません、万が一、落丁がありました場合は、どうぞ挙手でお知らせいただければ、担当からお届けいたします。
- 及川議長 それでは、議事次第にのっとりまして、会議の方を進めさせていただきます。

まず、議題1、「ESDに関する最近の取組について」に入りたいと思います。

初めに、ユネスコ／日本ESD賞について、文部科学省及び2016年のユネスコ／日本ESD賞を受けられた岡山ESD推進協議会の事務局を務めていらっしゃいます、岡山市ESD推進課、仁科課長より御説明を頂ければと思います。よろしくお願いいたします。

- 鈴木国際統括官補佐 最初に、文部科学省から賞の設定について、お話をさせていただきます。資料1-①-1、ユネスコ／日本ESD賞について、を御覧いただければと思います。

この資料にございますとおり、ユネスコに日本政府の財政支援によりまして、よりよいESDの取組に向けた動機付けと優れた取組を世界に広めることを目的に、創設をいたしました。名古屋での世界会議で、創設を発表いたしましたものでございます。

当面、GAPの5年間、毎年3件の優れた取組を、外部有識者から成る国際審査委員会による審査を経て、ユネスコ事務局長が決定し、表彰するというものになってございます。

2年目の今年は、岡山ESD推進協議会が特にホール・シティー・アプローチの実践を高く評価されて、受賞されました。そのほかに、本年はカメルーンの社会的弱者のエンパワーメントを通じた社会創りの取組、また、イギリスの学生団体による大学における持続可能な社会の構築に向けた取組が受賞しております。

この2団体を含むこれまでの受賞団体が一堂に会するフォーラムが、この週末に開催される予定でございますが、是非、岡山市の受賞プロジェクトと併せて、仁科委員の方から、御紹介を頂戴できればと思います。

- 仁科委員 岡山市、仁科でございます。それでは、ユネスコ／日本ESD賞を頂戴いたしました岡山ESDプロジェクトにつきまして、簡単に説明をさせていただきます。資料は、お手元の次の資料1-①-2を御覧ください。岡山ESDプロジェクトの概要についてということで書いてございます。この資料そのものは、昨年9月に受賞が発表されたときに、文部科学省のウェブ上でも発表していたものを、そのまま今回は付けさせていただきます。

岡山ESDプロジェクト、推進主体は岡山ESD推進協議会ということで、協議会組織ということで、市全体として取り組むという形をとっております。2005年4月に設立をされておりまして、そこに書いてありますような市民団体、NPO、学校、大学、企業、行政等、様々な様態の機関から成っておる推進協議会で、その事務局は市役所です。私がおりますESD推進課というところで担っております。参加団体の数は、当初20団体、この年度末には48団体まで増えたと思いますけれども、全259団体、現在は、もう一つ増えました、260団体ということになっております。

推進のやり方といたしまして、岡山ESDプロジェクト基本構想は、当初できたときに、基本構想を作成しまして、活動を進めてまいりました。

具体的には、1つ飛びますけれども、公民館やユネスコスクールをはじめとする学校、こういった地域コミュニティというところを拠点といたしました取組、様々なステークホルダーの協働、我々行政や岡山大学をはじめとするような大学、こちらの継続的な支援等の仕組み作りを、岡山モデルと呼びまして、こちらを推進の基本ということでやってまいりました。これを、ユネスコの方では、ホール・シティー・アプローチ

ということで御評価を頂いて、今回の受賞に至ったということになっております。

現在は、ユネスコのグローバル・アクション・プログラムの取組と期間を同じくした、少々ボリュームがありますけれども、岡山ESDプロジェクト2015 - 2019の基本構想を策定いたしまして、8つの重点取組分野ということで、推進をしております。その下、①から⑧まで、こういったものが重点取組分野ということに設定をされております。

綴じております、次の資料を御覧いただきますと、これは、カラーで、岡山ESDプロジェクトということで、4枚ほどありますが、実際には2つ折りの一般向けのパンフレットということにしております。3枚目に岡山ESDプロジェクト2015 - 2019と書いてありますけれども、先ほどの8つの重点取組分野、具体的に見ますと、こういったところを重点ということで進めているところであります。

このプロジェクトを、先ほど御紹介がありましたように、ユネスコの方で賞の授与がありまして、担当職員が授賞式にも出席をさせていただいた中で、先ほど文部科学省の方の説明にはなかったところで、どういうお話があったかというところ、この応募は昨年度、最初の2015年は世界で60件あった。今年度、2016年は120件あったと、倍増しておいて、その選考も非常に困難であった様子ということで聞いております。そのうちの3件というところで選ばれたところで、大変光栄なことであると考えております。

ユネスコ／日本ESD賞は、ユネスコの方では、全部で顕彰事業として、20というぐらいあるような中で、非常に特徴的な賞だということでお聞きしました。といたしますが、賞を取るところでおしまいということではなくて、そこから、更にどのように発展性、潜在性があるのかというところを評価しておるというところから聞いております。

授賞式に出席をしました職員から聞いておりますところでは、我が岡山ESDプロジェクトには、今後のGAP・キーパートナーの立場ということも含めて、ホール・シティー・アプローチを、日本中あるいは世界の他の地域に広めていっていただきたいという期待を大変持っておられるということを実感したと、職員が言っておりました。

これも、先ほど少しお言葉を頂戴しましたがけれども、次のこれもカラーの岡山ESDフォーラム2017ということで印刷をしておりますチラシを御覧いただければと思います。実は、このフォーラムは、岡山ESDプロジェクトが受賞しましたということで、地域でこぢんまりと開催しようかなということで考えておりましたんですけれども、文科省あるいはユネスコの方で、昨年度、今年度、受賞した6団体が一堂に会するような場

にしてはどうかというお声掛けを頂きました。主催というところで、我々岡山市ほか文部科学省も主催に入っていただきまして、海外からの方、岡山の方でお集まりを頂いて、それぞれの団体の活動発表をしていただく場と、あるいは、審査員であったところの永田先生のスピーチを頂くところといったフォーラムを開催する予定であります。午後は、岡山出身の有森裕子さんのスピーチや、パネルディスカッションには、当岡山市の市長もパネリストとして参加をするようなことで考えております。

ここからすると、かなり遠くて、なかなか皆様方お忙しいところかと思えますけれども、可能な限り、御出席を頂ければ助かるなど思っております。歓迎懇親会以外は、大きな会場ですので、はっきり言って、当日飛び込みでも、ご参加いただけるような状況になっておりますので、可能であれば、お足をお運びいただければと考えております。今週の日曜日というところですので、我々事務局の方も大変忙しくしております。職員が1人、インフルエンザで倒れたりして、そういった苦しい中ではあるんですけども、何とかやりたいと考えております。お時間を頂戴しまして、宣伝の方をさせていただきました。ありがとうございました。以上でございます。

- 及川議長 大変ありがとうございます。それから、どうもおめでとうございませう。今週の日曜日にフォーラムがあるということなので、御都合の付く方は、是非、ご参加を御検討されてはいかがでしょうか。

なお、議題1につきましては、報告ですので、4つの報告を全て承った上で、総括して、質疑を受けるという形にしたいと思いますので、御了承いただきたいと思っております。

それでは、続きまして、次のESD推進ネットワークについて、環境省より御説明をお願いいたします。

- 永見環境教育推進室長 ありがとうございます。環境省から資料1-②に基づきまして、ESD推進ネットワークについて御説明させていただきます。

先ほど局長からも御挨拶で申し上げたとおり、環境省では文部科学省と連携をいたしまして、ESD推進ネットワークの構築、また、そのハブとしてのセンターの構築に取り組んでいるところであります。かなりの委員の方々には、御協力、御助言を頂いております。この場をおかりして、感謝申し上げます。

具体的には、御存じの方もいらっしゃるかと思っておりますけれども、資料に基づきまして、説明をさせていただきます。資料、1枚おめくりいただきまして、ESD推進ネットワークの構築に向けた議論というところを御覧ください。こちらでは、GAPに基づき

まして、昨年、平成28年3月に、我が国におけるESDに関するグローバル・アクション・プログラム実施計画を、関係省庁連絡会議で決定をいたしております。

この下になりますけれども、こちらで、政策的支援の1つとして、多様なステークホルダーの連携促進に関することということで、ネットワーク機能の体制を整備するというので、その中でも、ESD活動に取り組む様々な主体が参画・連携し、地域活動拠点の形成とともに、地域が必要とする取組支援や情報・経験を共有できる「ESD活動支援センター（全国・地方）」を整備すると記載がされております。

これに基づきまして、委員会などで、様々な細かいところに関しましても御議論いただいて、このような概念図で取り組んでいるというものが、次のページでございます。ネットワーク全体は、ESD全国センターがありまして、地方センターがあつて、それとともに、単なる活動にとどまらず、ほかの団体に呼び掛けをしていただけるような団体であるとか、個人の方々に、活動推進拠点となつていただいて、ESDの裾野を広げていきたいというものでございます。

全国センターは、全国的なハブ機能を担って、支援をしていく。地方センターは、全国8か所を予定しております。札幌、仙台、東京、名古屋、大阪、高松、広島、熊本を予定しておりますけれども、地域におけるESD活動の支援等に取り組んでいく。それで、活動推進拠点とも連携をして、一緒になって、活動を他にも広げていただけるような方々と連携して、やっていきたいと考えております。

一例、具体的に申し上げますと、左側のところに書いてある、4つの「はたらき」、3つの「つなぐ」ということで整理をしておりますけれども、情報・実践の共有、支援体制の整備、学び合いの促進、人材の育成、また、多様なテーマをつなぐ、地域を越えてつなぐ、国際的な情報をつなぐということです。今までESDというのは、教育分野、環境分野、若干、人がつながってない部分もあつたり、また今後は消費者教育であるとか、国際理解教育であるといった様々なESDに関する分野のテーマをつないでいくということが、推進ネットワーク全体の使命ということで、センターを構築して取り組んでいきたいと考えております。

次のページになりますけれども、具体的には、先ほど申し上げたとおり、昨年の4月には、全国センターを設置いたしました。こちらは、現在、青山に事務所を構えておりますけれども、こちらで、各地の地域センター設立の支援であるとか、全国的な事業を行ったり、ウェブサイトの開設を行ったり、若者世代による情報発信なども行っ

ております。

1つの活動例をこちらで御紹介差し上げておりますけれども、ESD推進ネットワーク全国フォーラムを、11月26日に開催しております。御出席いただいた方も、御登壇いただいた方も、この中には多数いらっしゃると思います。ありがとうございました。この中では、200名弱の方にご参加いただいて、先進事例の共有であるとか、今後のセンターの在り方であるといったものの情報共有であるとか、議論をいたしております。

最後のページになりますけれども、地方センターの開設準備を今、最大の課題として、取り組んでおります。地方センターは、地域における官民共同プラットフォームとして、本年7月をめどに、全国8か所に開設すべく、準備を開始しております。こちらは、現在、環境省独自の事業として、環境活動のパートナーシップを推進するための組織で、地方環境パートナーシップオフィスがありまして、こちらの受託団体が当面担うということでやっておりまして、先ほど申し上げた全国8か所で開設をするということになっております。基本的には環境省の地方環境事務所の区割りと同じような形なので、東京に予定している地方センターは、新潟であるとか、静岡であるとか、その辺も含めて10都県ということで、若干、広いところと狭いところとあたりもいたしますけれども、基本的には、地方環境事務所と同じ区分でやるということになっております。現在、設置準備委員会を各地で開催して、検討を開始しているところです。各地、様々なやり方をしているのですけれども、大体のところというと、昨年、既に準備会合を1回開催しておりまして、本年度内にもう1回ぐらいやって、来年度7月までには、もう一回開催というところが多いように聞いております。

その中では、来年度、環境省の方で一定程度の予算を地方センターについて確保いたす予定で、予算案にも盛り込んでいただいておりますので、その予算の範囲内で、どのような事業を行っていくかだとかを、先ほど申し上げた4つの「はたらき」、3つの「つなぐ」、こうした機能に基づいて、それぞれの地域で御検討いただいております。この委員に関しましては、どこの地域においても、各都道府県から大体1人か2人出ていただいて、その委員の専門分野のバランスに関しまして、文部科学省にも御相談いたしまして、教育関係の方にも、環境関係の方にも入っていただいて、場合によっては、国際理解といったところの方にも入っていただいて、検討を始めているという段階でございます。以上でございます。

○ 及川議長 ありがとうございました。次に、関係省庁の取組について、事務局より御

紹介をお願いします。

- 鈴木国際統括官補佐 それでは、文部科学省から、文部科学省の今年度のESD関連事業の実施状況について御報告を申し上げます。資料1-③-1をごらんください。

最初に、日本ユネスコパートナーシップ事業、ユネスコスクールの関連を御紹介いたします。本年度、第8回になりますユネスコスクール全国大会を、12月3日に金沢で開催いたしました。今年度は、参加者が約650名ということで、岡山市で開催いたしましたときを除き、最大の参加者を得ることができました。

その次に、ESD重点校形成事業を今年度から開始しております。こちらはユネスコスクール、それ以外のESDに取り組む全国の学校から24校を採択いたしまして、ワークショップや研修会等の開催を通じて、全国のモデルとなるようなESDに関する取組を3年間実施していただくための支援でございます。24校を採択いたしましたけれども、このうちの10校につきましては、ユネスコの本部が実施している気候変動のプロジェクトにも参加いただくなど、国際的な広がりにも挑戦を頂いております。

3番目に、ESDの推進の手引は昨年度、作成しておりますが、これを活用した研修会を全国の5か所で開催いたしました。

最後に、ユースの関連でございますが、第3回となりますESD日本ユース・コンファレンスを、10月22から23日、岡山市で開催いたしまして、45名のユースが参加しております。こちらは、今月末にフォローアップ会合も、東京で実施される予定となっております。

2番目の大きなくくりといたしまして、グローバル人材の育成に向けたESDの推進事業がございます。こちらは、いわゆるESD推進のためのコンソーシアムに係る事業でございます。こちらは、教育委員会及び大学が中心となって、ESDの推進拠点としてのユネスコスクールとともに、コンソーシアムを形成して、地域全体で活動に取り組んでいただくものでございます。3年間の補助事業でございますが、平成28年度は、新規と継続のコンソーシアムを合わせて、全国で13のコンソーシアムを支援してございます。

その他の事業でございますけれども、予算の事業といたしましては、ユネスコ本部の方に、ESDグローバル・アクション・プログラム信託基金を拠出してございます。

会議出席関係でございますが、GAPパートナーネットワーク会合へ、ユネスコ国内委員会、文部科学省からも参加しております。

ESD課の関連職員の来日時に、ユネスコと日本のESD関係者との非公式意見交換会を、

11月に開催しております。

平成28年度のESD関連事業の実施状況は以上でございますが、引き続きまして、平成29年度予算について御紹介をさせていただきます。

1枚飛びますが、資料1-③-3を御覧いただければと思います。こちらが、平成29年度予算（案）の概要でございます。日本／ユネスコパートナーシップ事業では、ユネスコスクール又はユースに関する事業を実施する予定のものでございますが、9,300万円の内数となっております。内数としておりますが、この中に、一部、ジオパーク等のESDに直接の関係がないとも思われるものが含まれるために、一応、内数ということで記載をさせていただいております。

2番目のグローバル人材の育成に向けたESDの推進は、コンソーシアム事業でございます。継続するコンソーシアムの支援を、こちらの5,600万円でいたしていく予定になっております。

3つ目のグローバル・アクション・プログラム信託基金は1億300万円を、ユネスコに拠出の予定でございます。文部科学省からは以上でございます。

- 及川議長 ありがとうございます。それでは、環境省の方からお願いします。
- 池田環境教育推進室長補佐 続きまして、環境省より御説明をさせていただきます。順序は逆になりますが、資料1-③-2を御覧ください。

平成28年度環境省ESD関連施策実施状況ということで、まとめさせていただいております。資料にも書いてございますが、環境省におきましては、発達段階に応じ、学校、職場、地域等の多様な場において、ESD・環境教育の自発的な取組が促進されるよう、総合的に施策を実践しているところでございます。実施に当たりましては、文部科学省をはじめとする関係省庁、本日ご参加いただいているメンバーの方など多様なステークホルダーの方に御協力を頂きながら、推進をさせていただいております。

今年度の大きな動きといたしましては、先ほどの御説明にもありましたとおり、昨年4月に、東京青山にESD活動支援センターを開設いたしまして、現在、全国8か所に地方センターの設置に向けた準備を行っておるところでございます。

続きまして、資料1-③-4を御覧ください。飛び飛びになってしまって、大変恐縮です。このペーパーにおきましては、平成29年度環境省ESD関連予算（案）ということで、書かせていただいております。資料1-③-4になります。2つの費目「国連ESDの10年後の環境教育推進費」、「環境教育強化総合対策事業費」ということで書かせてい

ただいております。大きなものとしたしましては、「ESD10年後の環境教育推進費」の中で、3になります。が、「地方ESD活動支援センター（仮称）運営等経費」ということで、先ほど来、御説明させていただいておりますとおり、地方センター8か所の運営経費を新たに計上をさせていただいております。簡単になりますが、説明は以上です。

- 及川議長 ありがとうございます。それでは、最後の報告事項になりますが、④の持続可能な開発目標（SDGs）の推進について、事務局より御説明をお願いします。
- 福田国際戦略企画官 失礼いたします。SDGsにつきましては、既に多くの方々、御存じかと思えますし、手島先生がお配りいただいている資料の中でも、SDGsの実践が書かれておりますので、ごくポイントだけを申し上げたいと思えます。資料1-④-1でございますが、こちらはSDGs、これ自体が一昨年、の国連総会で決まったものでございますけれども、これを受けて、日本政府として、どのように進めていくのかということ、を、政府全体で決定いたしましたSDGsの実施指針の概要ということでございます。

SDGs自体は、17のゴール、169の目標ということで、非常に複雑な構造をしておりますけれども、日本政府としては、ここにある8つの優先課題と具体的施策ということで、できるだけ分かりやすく、また、それぞれの関連性を明らかにした上で進めていこうということで、まとめられているというものでございます。

これとESDとの関係というところが、当然、問題になってくると思っておりますけれども、その点につきまして、まず資料1-④-2の方でございますが、④-2が、実施指針の本文でございます。この中で、後ろの方でございますけれども、9ページを御覧いただきたいと思えます。9ページのところに、(4) 広報・啓発というところが出てあるかと思えます。当然、SDGsの中で、教育に関しても、様々な目標があるわけでございますけれども、それに加えて、広報・啓発の最後の行でございますけれども、2030年とその先の世界を担う子供たちに、持続可能な社会や世界の創り手となるために必要な資質・能力が育成されるよう、ESDを更に推進するとともに、学校教育をはじめ、家庭、職場、地域等のあらゆる場におけるSDGsに関する学習等を奨励していくという記載があるということでございます。

したがって、SDGsというものは、ESDに取り替わるというものではなくて、むしろSDGsに取り組んでいくことを通じて、ESDというものが更に深まっていく、よくなると捉えていくということなのかなと思っております。次第でございます。

これを受けて、具体的にどのような施策を進めていくのかというところを詳細にまとめているものが、次の資料1-④-3、表になっている横表での資料でございます。この中でも、また少しページが飛んで、恐縮でございますけれども、4ページを御覧いただきたいと思います。4ページのところで、下の方に、(教育)というところがございます。ここで、ESD・環境教育の推進ということで、真ん中の辺りに、ターゲット4.7とありますが、これが実際、SDGsの中の169の目標の中で、ESDに関する記載があるところでございます。ここに記載されているとおり、ESD、当然、環境教育もその一翼を担うものでございますけれども、様々な形でこれを促進していくということが記載されているということでございます。実際にこれをどのように今後フォローしていくのかというところは、また、政府全体で、また、国連の様々な動き、あるいは、例えば、ユネスコにおいては、教育あるいは科学といったものをどのように進めていくかというように、関係する国際機関の方でも、様々な議論が行われているという段階でございますので、そういう状況を見ながら、また私ども事務局としても、フォローの在り方については検討していきたいと考えております。以上でございます。

- 及川議長 ありがとうございます。それでは、これまで国内外のESDに関連する取組について、大きく4点について、御説明、御報告がありました。これを踏まえまして、ここまでの説明の中に、御質問あるいは御意見等があれば、承りたいと思います。挙手で御発言を頂ければと思います。委員の皆様、いかがでしょうか。よろしいですか。棚橋委員、お願いします。
- 棚橋委員 文科省にお聞きしたいのですけれども、今年度、ESDの手引を作っていました。その後、改訂をすると聞いておりましたけれども、それはどのようなことになっておりますでしょうか。
- 及川議長 文部科学省、お願いいたします。
- 福田国際戦略企画官 失礼いたします。手引の作成におかれては、棚橋先生、手島先生をはじめ、多くの方々に御協力いただいたところであるわけでございますけれども、その際にも御説明したかと思いますが、手引を活用した研修を、今、幾つかの都道府県の方で行っている。例えば、そういった場で、この手引を使っていただいて、当然うまくいくところもあれば、もう少しこういうところがあるといいのというような課題だとか、そういった指摘なども頂いているところでございます。そういったものをある程度まとめた上で、こういったものを次に作っていけばいいのかというところ

を考えていこうという今後の段取りを考えているということで、御報告差し上げたことがあったかと思えます。

今、まだ一部の手引の研修、これからというところがございますので、それがまた終わった段階で、どういったものを作っていくのがいいのか、先ほど申し上げたSDGsといった新たな動きなどもございますので、また、関係の方面、いろいろな方々の御意見を伺いながら、検討していきたいと思っております。

- 及川議長 ありがとうございます。棚橋委員、よろしいでしょうか。
- 棚橋委員 手引を作るときに、予算がとても掛かると思いますが、平成29年度のESD関連予算（案）の中で、手引がどこに入っているのでしょうか。
- 及川議長 お願いいたします。
- 福田国際戦略企画官 失礼いたします。前回作った手引も、実はそのための関連予算を当初から積んでいたわけではございません。これは、私どもの事務的なやり方でございますけれども、いわゆる私どもの役所において、様々な取組を進める上で、要は、必要な経費をある程度柔軟に行うための事務的な経費がございます。その中で、そういった措置を行っている。もちろん、その中でできることには、当然、限界もあるわけがございます。したがって、その状況をまた見極めながら作っていきたい。したがって、来年度にそういったものを作る可能性自体は、当然あり得ると思っております。
- 棚橋委員 ありがとうございます。
- 及川議長 ありがとうございます。ということですので、手引の改訂につきましては、今後、改訂のスケジュール、プロセス等がもし明らかになりましたらば、我々委員の方にも御周知いただければ、大変有り難いと思えます。よろしく申し上げます。 そのほかございませんでしょうか。
- 上條委員 お願いします。
- 及川議長 では、上條委員、お願いします。
- 上條委員 ありがとうございます。私たち市民団体としては、非常に気になるところの1つかと思うんですが、ESD推進ネットワークの中の活動支援センター、次年度は地方の支援センターを開設するというので、大分予算の方も、昨年度と今年度と異なっているように見受けられますが、環境省の方の予算の中に、ESD活動支援センターの運営経費等々が入っております、ただ、具体的なネットワークの中身としては、地域、学校、かなり総合的なものだと思うんですが、事業自体に環境省と文科省はどの

ように連携をされていく予定なのかということをお聞きしたい。

2つあるんですが、もう1点目は、学校、地域、職場などで、ESDに取り組もうとする多様な実践主体を、具体的にどのように支援若しくは巻き込んでいくような方針を構想されているかということ、確認をさせていただきたいと思うんですが、よろしいでしょうか。

- 及川議長 それでは、環境省でよろしいですか。室長、お願いします。
- 永見環境教育推進室長 文科省との連携ということですが、企画運営委員会にも文部科学省にも御出席いただいておりますし、それぞれの連携ということで、全国センターについては、運営を確認していくということで、毎月、文科省、環境省、センターの職員、一堂に会して、情報共有をして、課題の共有をして、実質的にみんなで議論をしてやっているというところでございます。

また、地方センターにつきましても、先ほど申し上げたとおり、少なくとも環境分野に限らず、教育関係の方々にも準備委員会には入っていただいて、本来であれば、もっと広い分野で、消費者教育であるとか、国際理解教育をやっていくというところ、手を広げていくべきではありますけれども、最初ということで、少なくとも文部科学省と環境省で協力して、その分野に関しては協力が図られるという形をとるということで、準備委員会には文部科学省の関係の方を入れて、推薦も頂いたりして、バランスがとれるようにして、協働を図っているところでございます。それが1つ目の御質問に対してということになります。

実践の共有とそういった方々の人材の育成ということでもありますけれども、いろいろ手法があって、それぞれ準備委員会で御検討いただいていると思います。1つは、全国フォーラムで行ったような形で情報共有をしたり、ワークショップのようなものを開いたりしてということになると思います。

また、今度の予算では、基本的にはモデル事業的なものは入っていないんですけれども、これとは別に、モデル事業のようなものを行っているものもありますし、他省庁も含めて、使えるような予算はあると思いますので、そういうものを、情報共有をして、うまく使っていくというところが一つのポイントです。また、このネットワークの特徴だとは思いますが、なるべく既に先進的に頑張っている方には、活動推進拠点という肩書で、他の団体の応援・支援もしていただくという形を考えておりますので、地域で先進的に頑張っている方々に、なるべく広く協力を

得て、その後が続いていく方々を応援していこうという体制をとれるように、各地で準備を進めているというところになります。

- 及川議長 ありがとうございます。文部科学省から、何か補足はございますか。
- 福田国際戦略企画官 教育関係の様々な主体につきましても、一言で言えば、できるだけ一緒にやっていきたいということかと思います。したがって、私ども文部科学省の方からも、各教育委員会あるいは知事部局の方に、センターというものができました、一緒にやっていくということを是非、御検討くださいという事務連絡を通知させていただいているところでございます。

ただ、具体的にどう連携していくかというところにつきまして、全国の統括団体はもちろん一緒にやっていくということは1つの有様かと思えますけれども、殊、各地域においては、様々な有様があり得るだろうと思えます。つまり、どういった団体が、それぞれの地域で取り組まれているかということも、それぞれによって、かなり違いもあるでしょうし、その状況に応じて、例えば、私どもの方から支援させていただいているコンソーシアムなどが、一緒にやっていくというケースもあれば、あるいは、別のやり方も当然あり得るだろう。したがって、逆の言い方をすれば、ある特定の団体なり、組織なりについて、一緒にやらなければならないというようにと言うというものではないだろうとっております。具体的な連携なり、あるいは、一緒にどのように進めていけばいいかというところで、また御相談したいようなことなどがあれば、また、そこは個別にお問い合わせいただければと思っております。

- 及川議長 ありがとうございます。

この円卓会議は、マルチステークホルダーで一応構成しておりますので、ESD活動支援センターの推進の趣旨あるいは活動と非常にリンクするものがあるのかなと思えますので、今のような課題につきましても、皆様の方からも、是非、情報提供を頂いて、様々なセクターあるいは様々な主体が協働参画できるようなセンターになるということを応援していくということで、皆さん、是非、知見なり、ネットワークをお貸しいただければという話だと思えます。どうぞよろしく申し上げます。

上條委員、よろしいですか。

- 上條委員 はい。
- 及川議長 ありがとうございます。それでは、次のテーマ……。すみません。小川委員、お願いします。

- 小川委員 済みません、小川です。文部科学省の方にお聞きしたいんですが、昨年末の中央教育審議会の方から出た学習指導要領改訂に関する答申の分で、答申骨子の中にも大分ESDのことが盛り込まれていたように思うんです。夏ぐらいからまとめられたものを少し見ていたときに、学習指導要領改訂の骨格のところは、ESDで議論したようなことなど、GAPも含めて、かなり意識された全体構成になっていると思うんですが、今回、資料の中にそれがなかった。

もし、このESDの関係の部局と学習指導要領改訂の部局との間で協議されたり、その辺の今後の展開のことで、何か御存じのことがあれば、教えていただきたいと思うんです。

- 及川議長 ただいま進行中のことですから、話せること、話せないことがあると思いますが、可能な範囲でよろしくをお願いします。
- 福田国際戦略企画官 失礼いたします。御質問ありがとうございます。先ほど小川委員がおっしゃった答申は、正しく中教審委員の皆様方の御議論の中で出来上がってきたものということでございますので、そこにおける記載は、当然、委員の御審議を踏まえたものということでございます。

その中でも、委員から御紹介があったとおり、今後の社会の在り方などといったものを見据えた際に、ESDというものも重要である。また、これからの学びの在り方として、有用であるという御意見を複数頂いていたということかと思って、私どもとしましても、大変有り難いと思っております。

他方で、指導要領そのものは、当然、事務的に文部科学省において、告示として、制定するものでございます。これは、年度内、したがって、本年の3月までには、これが告示としてまとまる。それが全面実施は、また小学校、中学校、高等学校というところで、それぞれ年次進行していくものでございます。

その中身につきましては、議長からあったとおり、今、役所の部内で、担当部署の方で検討しているというところでございます。当然、学習指導要領、いろいろな方面から注目いただいているものでもございますし、そういった御意見を頂きながら、担当部署の方で、しかるべく検討が行われているというところが現状ということでございますので、御理解いただければ、幸いです。

- 及川議長 小川委員、よろしいですか。
- 小川委員 はい。

- 及川議長 柴尾委員から、順番で。柴尾委員、お願いします。
- 柴尾委員 ありがとうございます。先ほどSDGsとの関連の中で、ESDにつきまして、更に推進をするということが、実施指針の中に書き込まれたということをお披露いただきまして、本当にありがとうございました。

そこに関連して伺いたいんですが、付表の中にもESDについて、文科省、環境省ということで、ESDの推進が出てくるわけですが、このような議論の中で、例えば外務省ですとか、ほかの省庁から、ESD若しくはESDを担ってきた方たちに対しての期待のようなものが表明されるような場面があったかどうか、少し教えていただければと思います。よろしく願いいたします。

- 及川議長 これは、いかがですか。福田企画官、よろしくお願いします。
- 福田国際戦略企画官 失礼いたします。個別の議論の詳細というところは、なかなか御紹介することは難しゅうございますけれども、先ほどの指針本文のところにもありましたけれども、SDGsを普及していく。当然、それは、国民生活、いろいろな形でSDGsの貢献につながる部分はあるわけなので、その普及をしていく際に、なかなかツールがない。

というときに、ESDというかなりしっかりしたバックボーンがあるといった取組は、非常にすばらしい。是非その中でSDGsをこさえていってほしいという意見は、たしか複数あったかなと記憶してございます。

ただ、これは、やはりそれをどのように伝えていくのかというところは、当然、これまでのESDに関する様々な蓄積、営みもあるわけでございますので、それをまた生かしながら、いい形でSDGsを取り入れていく。当然、それにはいろいろな試行錯誤なり、時間も必要であろうと思っておりますし、その辺りは、私どもとしても、是非、現場の様々な御意見を伺いながら、また考えていきたいと思っております。

- 及川議長 ありがとうございます。柴尾委員、よろしいですか。
- 柴尾委員 はい。
- 及川議長 手島委員、お願いします。
- 手島委員 先ほど、小川委員から、学習指導要領とESDの関連ということでお話がありました。学習指導要領も含めて、教育とESDとの関連について、まず、私どもの学校の資料を1つ提供したいと思っておりますので、委員の先生方、こちらの冊子になっている研究紀要なんですけど、本年度の八名川小学校の研究紀要をまず見ていただきたいわけです。

それは、ページでいいますと、100ページに当たります。傍聴の方々のところには、4枚目に同じ資料を入れてありますので、御覧いただければと思います。本校は、ESDに取り組み始めたのは平成22年度からということで、それからの学力、学習状況調査に基づく学力状況の変化のグラフなんです。それを御覧ください。ESDを始めたことによって、まず学力が右上がり向上していることがお分かりいただけると思います。これは、国語でも、算数でも、特にB問題、活用型能力を調べる問題で、大きく向上しております。

しかし、重要なことは、本校では学力の向上をゴールとして目指していたわけではなく、ESDの考えを学校教育に反映させる、そして、よりよい未来の社会を構築していくために、学校教育としての役割を考え続けてきたわけなんです。その結果として、B問題の学力が大きく上がっているということ、まず御理解いただきたいと思います。つまり、ESDは学力の向上にも大きな役割を果たすんだということです。世に言う学力向上策として、ドリルを買い与えて、繰り返し、どの子にも徹底した指導を進めている都道府県や区市町村があるわけですが、そのようなところで、このような学力の向上の結果が大きく出せたところが1か所でもあったかどうか、私は本当に知りたいなと思っております。ほとんどが横ばい状態だったように思います。

B問題の学力が大きく向上するということは、これからの変化の激しい社会で子供たちが生きていく上で、大変重要な能力につながるんだと思っています。つまり、日本の教育政策を考える上で、極めて重要なことだろうと思っています。まず、学校教育におけるESDの推進の重要性について、この委員会としても、資料を基に御確認いただけるようお願いしたいと思いました。次の話題にも関連してしまうかもしれませんが、どうなんでしょうか。

- 及川議長 手島委員、後ほどディスカッションの時間をとっておりますので、もし関連するものでなければ、できれば、そこでまた御提言いただきたいと思うのですが。
- 手島委員 学習指導要領……。
- 及川議長 要領に関するものですか。
- 手島委員 関するものなんですが、どうでしょうか。
- 及川議長 では、手短にさせていただいて、よろしく申し上げます。
- 手島委員 学習指導要領については、今回の学習指導要領改訂によって、全国の学校教育を通じて、ESDが具体化されるようになってきた。このことは、本当に世界に誇れ

る優れた政策的な支援だと思えます。これは優れたものなのですが、ただ、一般に公募をされる段階になると、この優れた内容がしっかり伝わらないことを懸念されるわけですね。

つまり、道徳ですとか、外国語の教科化の話であるとか、時間時数の話、学力の変化などばかりが取り上げられてしましまして、学校の現場では、中央教育審議会答申の全面に目を通されることはなく、どこかがまとめた簡易な改訂内容のパンフレットによって、それを理解して、実践していくような形になりがちなんです。ですから、マスコミ関係者へのこのESDに基づいた学習指導要領の改訂の一番中心になる趣旨の部分、しっかりと事前にプレゼンしていくことが大事なんではなかろうかと思えます。

つまり、従来の学習指導要領改訂のときにも、なかなか核心に迫るようなことが伝わらずに、枝葉末節に終わってしまったということの反省を踏まえて、学習指導要領の価値を、広く伝えていくことが大事だと思えます。そうすると、そこに基づいて、各省庁のいろいろな取組が、学習指導要領の推進する教育に向かって、力を合わせていくことができるのではないかと思います。それは、小川先生が先ほどおっしゃったことにつながっていくのではないかと考える次第です。以上です。

- 及川議長 ありがとうございます。学習指導要領に期待する熱い思いも含めて、お話いただきました。それが、この年度内に出されるということで、そのタイミングに合わせたESDとしての広報といいますか、学習指導要領の趣旨であったり、それと絡めたESDの重要性であったり、先ほど、ESD推進の手引の改訂が出ましたが、その部分、今のことをきちっと更に明確に出すというような、様々な方法が考えられると思うので、是非、委員の皆さんからもそういう様々なアプローチを御提案いただければいいなと思えます。ありがとうございます。

それでは、議題2の方に入らせていただいてもよろしいでしょうか。次に、ESDに関するグローバル・アクション・プログラム、通称GAPと呼んでいますが、そのGAPを見据えた取組及びGAPレビューフォーラムについて、まずは事務局より御説明をお願いします。

- 鈴木国際統括官補佐 資料2-1から3を使わせていただきますが、まず、資料2-2をごらんいただけましたらと思います。2017年がGAPの中間年であることから、GAPレビューフォーラムが開催される予定になってございます。資料にございますとおり、3

月6日から8日まで、これは、UNESCO Week for Peace and Sustainable Developmentというweekの一環として開催されます。このweekそのものは、ESDに関するフォーラムを初日と2日目、グローバル・シチズンシップ・エデュケーションに関する催しを4日目と5日目、中の3日目を合同の何か催しをするweekと発表されてございます。

実践者の皆様の好事例や経験の共有、またネットワーキングを中心とするフォーラムでございますが、特にESDとしては、GAPの振り返りが目的の1つとされておりまして、まだ案等の提示はございませんけれども、中間レポートがこちらで公表される予定と聞いております。

この資料の具体的内容のところでございますとおり、全体会合、分科会、展示形式のエキシビションが予定されております。我が国においても、分科会、エキシビション等に、全てのGAPキーパートナーの皆様で、合同で日本の取組について発信できるように、申込みをしております。展示ブースの方は、ちょうど採択されたことの連絡があったところでございます。

会議につきましては、インビテーション・オンリーとされておりまして、加盟国ではなくて、キーパートナーに対して、招待状が発信されておりますけれども、我が国といたしましては、有識者、文部科学省、日本ユネスコ国内委員会で開催いたします、我が国の実践について、こちらの場でもしっかり紹介いたしますとともに、他国の実践者の皆様との交流を深めてまいりたいと考えております。

その際の対応の参考とするため、また、先ほども御紹介いたしましたとおり、GAPの中間年であることを踏まえまして、日本のESD実践者の方に、アンケート形式で、GAPの下での取組について、フォローアップを行いました。このフォローアップについて、文部科学省と環境省から、こちら円卓会議の皆様への御報告として取りまとめましたものが、資料2-3でございます。日本における「ESDに関するグローバル・アクション・プログラム」の下でのESDの取組、ESDの実施状況に関するフォローアップ結果から見えるESDの傾向という冊子の形にしているものでございます。内容は、この後、簡単にかいつまんで御紹介いたしますけれども、こちらの案につきましては、きょうはお持ち帰りいただいて、今月中をめどに、事務局に対して、御意見等を頂戴できましたら、本日この後、御議論いただいて、頂戴する御意見と併せて、両省と及川議長と御相談の上で、可能な限り反映をさせてまいります。そのため、本日は、案という形で御報告をさせていただきます。

また、こちらの案でございますが、飽くまでもフォローアップの結果ということで、現在の案は、いわばファクトシートのようなものになってございますが、円卓会議のメンバーの皆様から、そのファクトから見える今後の進めるべき方向性のようなものについても、御意見を頂戴できるようであれば、そちらも反映してまいりたいと考えております。確定版はホームページに掲載するほか、こちらの資料を活用して、英文の広報資料のようなものを作成して、オタワでの会合でも紹介できればと考えております。

それでは、内容の方、本当に簡単にざっと御説明をさせていただきます。めくっていただいて、2ページの下、また3ページ目の頭にございますとおり、フォローアップは政府だけでなく、現場で行われている取組の現状を、関係者の皆様からの自主的な情報提供を募って、取りまとめたものでございます。昨年、こちらの円卓会議でも御議論を頂いたGAPの国内実施計画においても、ESDに関する活動については、関係者各自が、優先行動分野に沿って、自主的、主体的な点検を行うことが推奨されておりますことを受けて、行ったものでございます。

3ページの四角囲みの中にありますように、昨年の7月から9月の間、関係者、関係団体への調査票の交付、あるいは、関係するホームページ等を通じて、フォローアップを募りました。取り組んでいただいている内容、具体的な内容と回答者の属性について聞いたものでございますけれども、こちらの四角囲みの中の米印にございますように、例えば、優先行動分野として、何を自分たちの活動に当てはめているかといった選択等に関しまして、厳格なクライテリアを示して、回答してくださいということはせずに、どれを選ぶかといったところには、回答者の方に委ねた部分がございます。そのため、回答に若干の齟齬があったりする一方で、どのように考えて、活動されているかという傾向の見えるものとなっているかと思っております。

本文の方でございますが、まず、全体の傾向として、3ページ目の下から4ページ目にございますとおり、優先行動分野のうち、「教育者」、「ユース」、「地域コミュニティ」等、学校や地域における取組に比して、政策的支援、機関包括型アプローチの取組についての回答が、回答全体は、公的機関からの回答が最も多いにも関わらず、限定的であるという傾向について記させていただいております。

4ページから5ページに関しましては、優先分野ごとの傾向を御紹介させていただいております。例えば、①の政策的支援の部分においては、公的機関に限らない多様な

ステークホルダーが、ESDに関する政策形成過程に関わっていると認識しながら、活動していच्छること。また2番の機関包括型アプローチにおいては、もちろんのことではございますが、ほかの優先分野との組み合わせが多く見られ、また、文科省のESDコンソーシアム事業は、一定の役割を担っていること。飛びますが、5番にありますように、地域コミュニティの活動には、最も多くの市民社会団体で御回答いただいた方の7割近く、民間企業の9割近くの方が、この分野での活動に取り組んでいることといった、こちらから見える傾向についてまとめてございます。

めくっていただいて、6ページから10ページにつきましては、文部科学省、環境省、両省の取組、ESDに関連する取組が、優先行動分野にどのように寄与しているかにつきまして、記載をさせていただきました。実は、及川議長からさきに御指摘を頂いたんですが、誠に申し訳ないことに、こちらの円卓会議に関する記載が漏れてしまっておりますが、こちらの方は、私どもで追記をさせていただく予定でございます。

こういったフォローアップから類推される日本におけるESDの成果と特徴というところを、11ページから大きく4点まとめてございます。1点目といたしまして、いずれの分野においても、学校教育を通じて行われている取組が非常に多いということ。2点目といたしまして、環境教育を土台に、いわばESDの視点を加味するような形で発展しているという傾向。3点目といたしまして、必ずしもESDという名称を掲げずに、取組が行われている例が、教育分野、企業の持続可能な社会の構築を目指す活動等の中で、幾つか見られているということ。12ページになりますけれども、4番目といたしまして、地域の多様な主体を巻き込んだESDの展開が、非常に多くの日本全国の地域で行われていることといった特徴を、最後にまとめてございます。

このフォローアップのESDの傾向という案でございますけれども、両省の取組以外については、募って、出していただいた具体的な取組内容、実践者の方から頂戴した具体的な内容を記載しておりません。記載しておりませんのは、情報提供を求めた際に、公表の可否について、取扱いをはっきり定めなかったことから、ちょっと公表ができない部分がございます。その分、自由な回答は得られたかと承知しておるんですが、これは、1点、取りまとめに当たっての今回の反省点でございます。次回以降、このようなフォローアップをする際には、改善したいと考えております。

オタワでの会議には、こちらのフォローアップ等も踏まえて、本日の御議論を参考に、対処してまいりたいと考えておりますところ、資料2-1の方に、本日、この後の

御議論の考えられる論点の例として、両省で考えたものを御紹介させていただきました。こちらの資料2-1に捉われずに、御議論を頂戴できたら幸いです。以上です。

- 及川議長 ありがとうございます。それでは、ただいまの説明を踏まえまして、資料2-1にありますGAPを見据えたESDの取組についての論点（例）も参考にさせていただいて、これまでのESDの取組を踏まえた今後のESDの展開について、闊達などいまいしょうか、自由に御議論を頂きたいと思います。

なお、本議題につきましては、ESDの展開について、委員の皆さまから広い視点での御意見を頂けることを目的としております。レビューフォーラムにおける発信に向けては、資料2-3を参考にしたリーフレットを作成するというので、今、御説明いただきましたけれども、それにも適切に反映していきたいと考えておりますので、これらを踏まえ、大所高所からの意見を頂戴できれば、幸いに存じます。

先ほど手島委員の方からは、学校教育の観点からの力強い提言を頂いたところなんです。ESDは、皆さん御存じのように、様々なアプローチ、ステークホルダーがいらっしやいますので、せっかく全国から集まった皆様ですから、なるべく多くの方というか、全員に、是非、発言を頂いて、インプットを頂ければと思いますので、どうぞ御遠慮なく御発言いただければと思います。どの観点からでもよろしいので、いかがでしょうか。

- 佐藤委員 では、いいですか。
- 及川議長 佐藤委員、お願いします。
- 佐藤委員 佐藤です。よろしく申し上げます。5点を手短かに話をしたいと思います。

1点目が、GAPの優先行動分野だけではなくて、ユネスコの中に出てきている4つの主要なテーマ領域、持続可能な生産・消費、生物多様性、気候変動、災害リスク削減などというテーマに基づく物の見方も検討していく必要があるのかと思って、コメントを、まず1点挙げさせていただきます。私はジャパンレポートのときに、ちょうど有識者の取りまとめをやらせていただいたんですが、あそこで言われたものと、このGAPでの取組との整合性を是非とっていただきたいということが、2点目でございます。当然、SDGsの接点がこの論点の中にあるわけですけれども、その中で明記をしていただきたいということが、3点目。4点目が、例えばユネスコ／日本ESD賞だけではなくて、東南アジアの教育大臣会合がやっているSEAMEOのジャパン賞も、このESDの取組とし

て、日本としてもアピールしてもいいのかなと思って、コメントをさせていただきます。最後です。5点目ですが、こちらの資料2-1に書かれている真ん中のポイントです。いろいろな主体の役割はどのようなものかということも、確かに重要なんですけども、やはり、そういうものを役割で分担させるだけではなくて、そういう役割がお互いに生き、生かされる関係性としてのガバナンスの捉え方、どういうふう to そういう人たちと一緒にやっていくかという主体が生き、生かされる仕組みについて書いていただくことが重要かなと思います。以上です。

- 及川議長 ありがとうございます。これについて、文部科学省や事務局から、何か御意見はございますか。よろしいですか。分かりました。

今、5点について、御指摘、御提案を頂きました。SEAMEOについては、日本の取組という枠組みでよろしいのでしょうか。日本も入っているのでしょうか。どちらかという、海外に向けた取組みたいな感じもあるんですか。

- 鈴木国際統括官補佐 あれは、日本からの拠出金でやっているものではございますが、SEAMEOの設置しているESD賞でした。そうでございます。

- 及川議長 ということなんです。

- 佐藤委員 SEAMEOは、ジャパン賞ですか。

- 及川議長 SEAMEOはジャパンのファンズ・イン・トラストなんですね。

- 鈴木国際統括官補佐 お金は拠出しております。

- 及川議長 お金は出しているけれども、向こうがイニシアチブを持っている。済みませんでした。その辺、後で確認した上で補足説明をお願いします。

- 鈴木国際統括官補佐 承知しました。

- 及川議長 今のことについては、レスポンスをよろしくお願いします。包括的に、今、5点の話が出されましたが、そのほかにどうでしょうか。

佐藤委員、1つ確認なんですけど、先ほどジャパンレポートの話が出ましたが、あれはDESD中間年にドイツのボンに出したものですか、それとも、最終年の世界会議に出したものですか。どちらのジャパンレポートをおっしゃっていますか。

- 佐藤委員 私としては、世界会議です。最後のときに出されたものの中で、日本の経験を踏まえた中のインプリケーションが書かれておりますので、是非それを生かしていただけるといいかなと思います。以上です。

- 及川議長 ということで、DESDの最終年のジャパンレポートですね。分かりました。

ほかにどうでしょうか。せつかくですので、私の方から指名させていただいてよろしいでしょうか。

川上委員、NGO、民間ユネスコの立場からして、どうですか。

- 川上委員 ありがとうございます。私どもは、ユネスコの、Global Action Program on Education for Sustainable Development のGAP Commitmentとして、ESDパスポートを、2013年から2019年まで、最初は4,000人ぐらいの子供たちから始めて、徐々に数を増やしていったということを、実際に書かせていただいている、1つの柱の活動として行っています。

当初、2013年度は、たしか4,000人ほどの学校の生徒たちが対象となっていて、それが2014年度は1万人をちょっと超えて、2015年には2万人、今年度は2万5,000人ぐらいに達しているかなという状況です。ESDパスポート自体は、生徒たちがボランティア活動を通して、地域の課題やグローバルな課題に取り組んで、自ら、活動、行動を起こしていくという枠組み、仕組みなんです。

まず、ESDパスポートである以上は、ESDであるかどうか、単なるボランティア・パスポートに終わっていないかということが、今、私たちが抱えている課題です。数を増やすことだけが重要なのではなくて、クオリティーの部分をどう見ていけばいいのかなと感じております。

一方で、私たちのようなNGOは、パスポートの印刷代も、当初は企業が協力してくださっていた部分があるんですが、その企業の御協力がなくなり、印刷代を、どうしたらいいのかなという物理的な課題も抱えております。ですので、私たち独自の活動も大事ですが、せつかくこういった会議もありますし、他団体とも連携しながら、学校現場へのアプローチをやっているといいのかなと感じております。

- 及川議長 ありがとうございます。今の論点は、多分、この論点例の1つ目に当たるのかなと思いながら聞かせていただきましたけれども、自分の組織・団体として、自らの活動をどう考え、それを踏まえて、どういった取組を行う必要があるかという課題点も含まれての話だと思います。そういう課題なり、実績なりを持たれている団体はたくさんあると思うんですが、いかがでしょうか。きょう初めてお見えになったという飯田委員から、若い力でよろしく提案を頂ければと思います。
- 飯田委員 せつかくですので、そうしたら、ユースに近い立場から、お話しさせていただければと思います、私から2点ありまして、1つがユースに関してと、もう一つが

ESDに該当する分野に関して、お話しさせていただければと思います。

1つがユースに関してなんですが、私自身も3年前に「ESD日本ユース・コンファレンス」に、参加者として参加させていただいて、それが1つのきっかけとなって、今日に至るということで、今でもそのコンファレンスのメンバーとは交流をしています。SNS等で交流していますし、直接のつながりもある状況なので、その機会はすごく有り難かったと思っています。それが、今回、今年で3回目、数を重ねて、またフォローアップ会合などもあって、その1回目、2回目のメンバーがボランティアであったり、リピーターであったり、スタッフであったりという形で、回を重ねるごとに縦にもつながっているということは、すごくいいなと思っています、これが今後も続いていけば有り難いと思っています。

ユースのつながりは、私自身も実感しているんですが、ESDを進めていく上では、マルチステークホルダーのつながりが重要だと思うんですけども、ユースを支援する、特に学生やその下の世代を支援すること、そこでつながりを作ることというのは、その数年後のマルチステークホルダーのつながりを作ることに、直結してくるんじゃないのかと思っています。私自身も3年前、コンファレンスで出会ったメンバー、当時、学生だったメンバーも、今ではいろいろな立場になって活躍してしまっていて、中にはNPOに行っている人もいたり、企業で働いている人もいたり、教員になっている人もいたり、当時の3年前のつながりが、今では自然とマルチステークホルダーのつながりになっているという意味で、ユースがつながるということは、すごく大きな力を秘めているんだなということ、私自身も本当に実感しているところなので、今後もこのようなコンファレンスをはじめ、ユースのつながりを支援していただけると有り難いと思っています。

もう一つが、ESDの取組の資料2-3の案のところで、11ページに、日本におけるESDの成果と特徴に出ているところなんですが、2番で、環境教育を土台として発展するESDということで、今の日本のESD、特にユースのいろいろな集まりを見ても、やはり、環境教育をやっている方、仲間がすごく多いのかなという印象を受けています。一方で、ESD以外のところのつながりや、私自身の活動などを通じていろいろな方と話している中で、もちろん環境教育はESDに直結するものなんですけど、それ以外にも国際理解であったり、食育であったり、キャリア教育であったり、科学教育や科学コミュニケーションのようなどころであったり、そういうところで研究をしたり、活動をしたりし

ている若者、同世代と話していても、ESDは親和性が高いのかなと思っています。なので、特にユースをコンファレンスで募集したりするときに、従来の環境教育、環境活動をやっている人を集めると同時に、いろいろな他分野からも人を集めることによって、数年後のESDのつながりが更に広がっていくのかと思っています。

- 及川議長 ありがとうございます。それでは、同じユースで頑張っていच्छる辰野委員から、御提言があればどうぞ。
- 辰野委員 ありがとうございます。GiFTの辰野です。今、飯田委員からお話がありましたように、去年の10月に開催されたESD日本ユース・コンファレンスが3回目になったわけなんですけれども、2014年には岡山中、国際会議としてのUNESCO ESD ユース・コンファレンスが開かれていました。そのときには、世界48か国、50名のユースが集まりまして、ユース・ステートメントを作ったんですけれども、そのときにユースが強く言っていたことが、私たちを育てる立場としておかないでほしいと、私たちを、ESDを作る、参画するステークホルダーの1人として、中に入れてほしいということ強く訴えていたんです。

実は、今、改めて感じることが、例えばこの円卓会議におきましても、飯田委員や私もESDユース・コンファレンスの1回目の参加者であります、会議に入れていただいております。岡山ESDユース・コンファレンスの出身者たちの中には、ユネスコ/日本ESD賞を受賞し、ロールモデルとして活躍しているメンバーもいます。なので、頑張っていて、頑張るとユースを応援するというよりも、そのユースたちが、自分たちが作った団体をもって、賞をとれるようになった。このようにユースの参画を認めてくださっていることは、この2年の大きな成果なのではないかと思っています。

もう一つ付け加えまして、その活発な国際会議のユースたちは、岡山ユースと、どうやらあだ名のように付いているようです。その参加者たちが、それぞれの国で活躍しながら、ESDを広めています。そして、今、日本でのユース・コンファレンスに参加しているメンバーを、ESDユースとまた呼び名を変えまして、フェースブックの方でも、積極的にESDに関わる若者たちのコミュニティに、586人のメンバーが入ってまして、そのページでは、毎日とは言いませんが、週に何回かはESDの勉強会であったりですとか、イベントの情報交換が活発にされるようになりました。2014年から比べますと、ESDユースや、岡山ユースと名前が付くほど、ユースたちが活発にESDに関われるようになったのではないかと思っています。なので、そのような記載も、改めて

入れていただければと思います。以上です。

- 及川議長 ありがとうございます。それでは、どんどん、いろいろな方々に御発言いただきたいんですけども、やはり、経済界としても、これまでも取り組んでいらっしやいますし、今後も持続可能な社会の構築は大きなテーマとなるとと思いますので、篠塚委員に御発言いただければ、大変有り難いのですが。

- 篠塚委員 経済同友会の篠塚と申します。今回頂いた資料2-1の論点（例）の丸の3つ目でございますけれども、感じたことは、ここ一、二年で、経済界といいますか、私ども経営者個人からなる団体なんですけれども、SDGsについては、比較的、経営者の人が口にする機会が増えているような印象を持ちます。

一方、ESDについては、SDGsに比べれば、認知度が高いと思うんですけど、その高まりの度合いは、やはりSDGsの方が高いような印象があります。ここに書いていただいていますとおり、ちょっと言葉尻を捉えて申し訳ないという点もあると思うんですけども、「ESDの推進は、SDGsの全17ゴールの達成に寄与するものであるとも考えられるが」というところなんですけれども、私は、何となくそういう感じはいたしますが、これを理論的なのか、仮説なのか分かりませんが、これをすることが、これの寄与につながるという、ある程度の想定といいますか、そういったものが見えると、よりSDGsを目指そうという考え方の方は、比較的いらっしやると思うので、それにつながるESDをやっているのか、ということにつながるのではなかろうかと思います。

初めてのことがいろいろあると思いますが、とにかくやってみろというアプローチもあるんですが、ある種の仮説のようなものを置いた上で、それで具体的なことをやってみて、その結果、貢献があったのか、なかったのかというアプローチがあってもいいのかなと思いました。以上でございます。

- 及川議長 ありがとうございます。ESDをやる意義を、途中のストラテジーを、もう少しきちっとSDGsと結び付けて取り組むという話だと思います。川嶋委員どうぞ。

- 川嶋委員 日本環境教育フォーラムの川嶋です。昨年11月にオリンピックセンターで開催されたESD推進ネットワーク全国フォーラムの準備を、ESD活動支援センターの柴尾さんとずっと相談して、第3部のファシリテーターをやったんですけど、その会場でも、「ESDはSDGsに替わったのか」という声を、数人から聞きました。もちろん、そうではないんですけど、それを言った人も、当日、ESDという言葉と同じぐらいSDGsの話がとても多かったので、そういうふう映ったようです。

先ほど、文科省の方のお話の中にも、SDGsがESDに取って代わったのかということも、ちらっとおっしゃっていましたが、もちろんそういうことではなくて、全然フェーズの違う話だと思うので、今おっしゃった、「SDGsの全17ゴールの達成に寄与するものであるとも考えられるが」と、僕は、達成に寄与するものであると思っています。ESDが言われたときのESDの中のSDのイメージが、みんな割とばらばらだったものを、ようやく整理してもらったし、非常に分かりやすくなった。何のために、私たちは、どこに向かって、教育を進めていくのか。つまり、どういう世界を創っていくために、教育という言葉が、もっとお互いの理解や普及ということも含めてだとは思いますが、何のためのEなのかという、SDが整理されたものがSDGsで、非常に分かりやすくなったと思います。

ですから、今、経済同友会の方もおっしゃっていらっしゃったSDGsを理解するという行為そのものが、ESDなんだということが1つだと思います。同時にSDGsを実現していくための様々な人材育成なり、皆さんの理解を求めるという行為が、またESDなんだと思います。それで全てを言い切ると、SDGsがESDに取って代わったという話になりかねない。ただ、細かく言うと、17のゴールのうちの4番の7に、教育、ESDのことが書かれているから、そこがESDなんだという言い方もあるんですけど、それは1つの言い方だと思います。一方SDGsを理解することによって、どういう社会、どういう幸せな未来を描いていくのということに関して、SDGsの17の目標について、私たちが取り組むプロセス自体が、Eなんだという理解でいいのではないかと私は思っているんです。きょう、この部屋にいらっしゃる方たちが、そういう理解について決をとるわけにもいかなないので、どうでしょうかという感じなんです。

- 及川議長 今、川嶋委員の方から、そういうふうなまとめ方と申しますか、ESDの今後の見せ方というか、アプローチというか、そういう話がありました。これについて、何か御意見がある方はいらっしゃいますか。手島委員、お願いします。
- 手島委員 SDGsが示されたとき、またややこしいものが出てきたなど、私は最初はそう感じたんですが、いろいろ、よくよく勉強してみますと、SDGsの17の目標がはっきりしてきたことによって、ESDの具体的に何をやったらいいのかということは、大分明らかになってきたように思います。そういう意味では、ESDは何だかよく分からないと言われていた人たちに、こういう中身なんですということを説明しやすくなったと現場では感じています。

それをもう少し具体的にまとめたら、もっと分かりやすくなるのではないかと思って、私どもの学校では、この資料の6ページ目に、SDGsの実践計画表を作ってみました。カラー版なので、ちょっと御覧いただけたら有り難いです。

- 及川議長 手島委員、時間が押していますので、簡潔にお願いします。
- 手島委員 はい。つまり、これを、環境であるとか、人権であるとか、あるいは、多文化理解や国際理解という視点で、この17の項目を分けてみると、そうすると、その中で、今度は具体的に環境の取組としては、ここで挙げられているような9つの中身がある。そうなのか。その中のどこを自分たちは今、授業でやっているのかということ、そこに学年や単元名で書き出してみたいんです。そうすると、どの学校でも、いろいろな取組をしているはずなんだけれども、そのことが、SDGsのこの表の中に位置付けられることができるのではないだろうか。そうすると、ただ、私たちはESDに取り組んでいますとか、あるいは、授業をやっていますということではなくて、私たちは持続可能な世界を創るために、こういう学びを進めているんだ、この分野で、この学びをこの学年でやっているんだということが、はっきりしてくる。これが、実施計画になってくるんだろう。あるいは、この中で、どうしても入らない項目が出てきたとすると、自分の学校あるいは自分の組織では、この部分が足りないのではなかろうかというような評価の表としても使えてくるのではないだろうかと思っています。SDGsが出たおかげで、ESDが大変進めやすくなったように思います。以上です。
- 及川議長 ありがとうございます。国内委員会等でも、そういう議論が出たんですけども、ESDのSDをSDGsに置き換えて、Education for SDGsみたいな形で、ゴール4の部分だけではなくて、SDGs全体をきちっとゴールとして見せる。ただ、幾ら包括的にやっても、1つの団体とか、1つの学校がそれ全てをできるわけではないと思うので、それぞれが重点を持ちつつ、多様な主体の総合として、取組のトータルとして、その地域なり、我が国がSDGsの実現に向けていくという方向性で、少し考えてみる。今の話を聞いていると、その取組をきちっと枠組みとして評価してやるという形で考えることが、自然なんだろうなという感じはします。皆さん、それについては、ほぼ御異論がないことかなと思われま。

それでは、重さん、いかがでしょうか。この点に関わらないことでもよろしいです。重委員、お願いします。

- 重委員代理 ありがとうございます。阿部の代理で参りましたけれども、今おっしゃ

ってくださったSDGsのゴールを達成するための教育はESDだと、私もますます確信をしております。

そのほかに、今のグローバル・アクション・プログラムのほとんどESDの取組の中に、聞き方は難しいのかもしれませんが、ESD活動支援センターが国内でできたというところは、成果と特徴というところまで、まだアプローチの最中ですが、日本の取組として、是非、書き込んでいただけると有り難いと思います。以上です。

- 及川議長 環境省は、その辺について、いかがでしょうか。これは文部科学省が作ったものですが、御意見をお伺いしたいと思います。
- 池田環境教育推進室長補佐 御意見ありがとうございました。ESD活動支援センターの取組につきましては資料2-3の6ページの、「ESD推進ネットワークの構築」というところで触れさせていただいております。及川議長 重委員、よろしいでしょうか。
- 重委員代理 はい、結構です。
- 及川議長 GAPのプライオリティーではなくて、政府の取組として掲載しているということなので、御了承いただければと思います。
- 重委員代理 見落としておりました。失礼します。
- 及川議長 では、棚橋委員、お願いします。
- 棚橋委員 SDGsとESDという話なんですけれども、SDGsは何をやるかが明確、分かりやすい。分かりやすいだけに、みんなの理解は進みやすいんですが、でも、SDGsの内容に合わせて、ESDを推進するとなったときに、ESDはeducationですから、指導方法もあれば、評価方法もあるわけですよ。

その意味では、狙いとしては、分かりやすいから、SDGsでいいんです。でも、それをSDとしてやったら、それがESDなのかという議論は成立しないと思います。ESDとしての議論をここでするのであれば、SDGsを具体的にどのように教育として活用するかというところを、話し合わなければいけないと思います。それが、1点です。

もう1点は、こちらのGAPの下でのESDの取組（案）ですけれども、11ページに、日本におけるESDの成果と特徴ということでまとめていただきました。これは、こういう結果になりましたというまとめは頂きましたが、では、分析はするのかということになると思うんです。例えば、マルチステークホルダーだと言いながらも、①にあるように、学校教育を中心とするESDがやはり多いんだということになったときに、それをどの様に捉えるのかということ、議論になっていません。環境教育を土台としたESDが

多いということも議論になっていません。円卓会議であって、報告会ではないはずですので、是非、議論をする場になっていただきたいと思います。

日本のESDの現状を踏まえた上で、教育の質を根底から変える力があるESDの本質について議論したいと思います。SDをやったら、ESDなんだということではなく。以上です。

- 及川議長 及川議長 御指摘ありがとうございます。この中にも、教育関係者の方がたくさんいらっしゃると思うんですけども、円卓会議の中で、SDの専門家の方といますか、そちらをメインに取り組みられていらっしゃる方と、どちらかという、Educationをメインに取り組みられていらっしゃる方がおります。その融合がESDであって、何もSDだけを取り留めて、SDイコールESDで突っ走るという話ではなくて、そのEducationの部分、是非、教育界の方々から、この会議の時間では、もちろん足りないと思いますので、やはり、そういう発信をずっと続けていただいて、その融合をいかに図っていくかということが、世界会議の中でも強調されましたし、今後のセカンド・ステージのESDでもあると思います。やはり、そこは大事にしていかなければならないことだということは、同感だと思います。

ただ、それを学校教育の立場とか、教育の立場だけからも、そういう話ですとなると、それはまた時間的な部分もありますから、いずれレビューする中で、その議論を十分踏まえる何か機会等が、今後あればいいなど、個人的には思った次第です。

そうはいつでも、私の役目としては、全ての方の意見を聞きたいということがありますので、申し訳ありませんが、そこを優先させていきたいと思います。その後で、最後に時間があれば、またお願いしたいと思います。安田委員、お願いしてよろしいでしょうか。

- 安田委員 論点の最初の丸のところなんですけど、この2年間、各組織・団体として、自らの活動をどのように考え、これからどのような取組を行う必要があるのかとありますけれども、私どもは市の教育委員会でございますので、いかにESDということ、どのように広めていくのか、啓発をしていくのかということが、まず取り組んできたところでございます。

市長にESDの話をしたときに、理念は分かるけど、具体的に分からないので、教育委員会として、もっと市民に分かりやすいように、広めていってほしいということで、市長をトップとしたESDの推進本部会議を立ち上げていただきました。各市のそれぞれ

の部の部長が委員となり、それぞれの施策の中で、ESDを盛り込んでいく、そして、予算を付けてやっていくというように、岡山市のような岡山モデル、ホール・シティー・アプローチに近いと思いますけれども、そのような取組で、この2年間、やってきました。経済界にも、私、自ら話をしに行って、ESDなどという話をしてまいりました。

やはり、いかに広めていくのかということを考えていかないと、閉ざされたESDであってはならないと思います。まだまだ認知されていないということが、実感としてあります。それで、様々な関係団体とどのようにつないでいくのかということ、やはり考えていかなければならないということが、大きな私たちの課題でありました。やはり、各市町村の教育委員会の教育委員が集まる機会があったんですが、そこでお話をさせていただきましたが、まだまだESDそのものは御存じなくて、当然、GAPも分からないという方もたくさんいらっしゃった。SDGsも全然、初めて聞いたという方も、教育委員の中には、たくさんいらっしゃったわけなんです。

そういう意味で、やはり、もっと、もっと広げていかなければならないという、私たちはコンソーシアムとして受け取りますので、そういう立場で、大牟田市教育委員会は進めていきますが、やはり、できれば、文部科学省として、きちんと県の教育委員会などということ、もっと、もっと啓発していただくと、有り難いかなと思っ

ているところなんです。今、若い先生たちが増えてきているんです。ESDのことについてお話しするときに、様々なテーマは、全てESDに通じているようなお話をさせていただいております。やはり、理念として、具体的な活動して、それは、ESDとして包括できる。それは、具体的に、今度はSDGsにつながっていくんだというお話を、今させていただいているところなんです。具体的なそれぞれの発達段階に応じた活動、それぞれの団体の役割の中での活動の在り方については、やはり、もっと、もっと広げていかなければならないと思っ

- 及川議長 ありがとうございます。それでは、教育行政の話が出たので、行政で、最初、回していきたいと思っ
- 仁科委員 ただいま安田委員がおっしゃったような状況は、当市も大変よく分かります。冒頭、賞も頂戴したというようなお話もしましたが、逆に、2014年の世界大会を行った時点は、市民あるいは職員の間でも、ESDに関する認知度は一定のものが

あったわけですがけれども、2年少々過ぎまして、逆に、そういった言葉に触れる機会、市民の皆さんにも、やや減っているということは事実でございます。

あるいは、職員の間でも、SDGs、国連であったり、昨年5月には、国の段階で、閣議決定などあったものの、自治体の行政の中では、まだまだ認知をされている度合いは非常に少なく、これをいかに高めていくかということが課題であるかなと考えております。

○ 及川議長 ありがとうございます。同じく、世界会議をホストしました、愛知県の川村委員、お願いします。

○ 川村委員 ただいま議長からお話いただきましたように、愛知県は岡山市と一緒に、名古屋市でESDの世界会議を2014年に開催したんですけれども、私ども、その担当が、環境部が主体になってやったということで、ESDの中で、どうしても環境的な側面が強くなっている。ESDの中には、いろいろなテーマがあると思うんですけれども、環境部がやってきたということで、どうしても環境という面が表に出ております。しかも、教育委員会としては、ユネスコスクールを主体にやってみえて、この辺、どうやって連携していくのがいいのかということ、常々、私どもも、ESDを発展していく上では、やはり、子供たちにそうした考えを持つ力を付けていただくことが必要であろうということで、何度か、そこら辺をうまくコラボしていきたいと常に思っておりました。

今年度、学校教育の中で、NPO、企業など、いろいろなそういったESDの活動をやってみるところに入っていたきたいということで、ガイドラインみたいなものを策定しております。私どもの本県の中でも、そういったコーディネートするような機能は置いているんですけれども、やはり、今後、こういった多様な主体が交流する中で、ESDの活性が図られていくと思っておりますので、そういう意味では、今度、国の方で整備していただく活動支援センターに、大いに期待しておりますので、是非このESDの中に、しっかりと位置付けて、やっていっていただければ、私どもとしても有り難いと思っております。以上です。

○ 及川議長 ありがとうございます。それでは、林委員、お願いしたいんですけど。

○ 林委員代理 日本環境教育学会なんですけど、別の学会の話です。日本ミュージアム・マネジメント学会というところがありまして、博物館のことです。私は博物館にいるもので、博物館のESDをずっと考えてきた人間なんですけれども、ユネスコで、もう一つ、SDGsとほぼ同じタイミングで、博物館と博物館のそういう遺産的な資料に

関しての推進の勧告が11月に出ました。1960年に出た後、55年ぶりだと思いました。非常に久しぶりにユネスコの総会で、博物館について、加盟国に対しての勧告がออกมาして、それについての勉強会のワークショップを、昨年12月5日に、日本ミュージアム・マネジメント学会の関東支部会、ミュージアム・エドゥケーター研究会というものでやりました。私も企画とファシリテーターをやったんですが、そのときに使った材料が、SDGsなんです。博物館とSDGsがつながるという感覚、私自身も実はなかったんですが、その直前ぐらいに、ユネスコの科学館の関係で、世界科学館の日が11月8日にあったんですが、各科学館、科学博物館が、SDGsに関わる何かイベントをやりなさいということが、そのお題だったんです。それで、言われて、初めて、そうか、SDGsと博物館をつなげてみればいいではないかということがよく分かったということで、今まで博物館、ESDをどうやってつなげるかということが見えなかったんですが、SDGsという材料が出たおかげで、割とクリアになって、アクティビティーもうまくいったんです。

同じようなことは、多分いろいろなところで起こり得ると思うんです。やはり、SDGs、先ほどから話が出ているとおり、ある意味で、取りあえず、本当に取っ付きやすい部分がある。もちろん、深くいけば、延々あるんですけども、ユネスコの博物館の枠組みは、それなりに難しいものなんですけど、それをSDGsと結び付けると、感覚そのものにも非常に迫ることができると思って、そういうことも、博物館の業界でも始まっている。

同じように、やはりSDGsを、それぞれの分野、セクターで、考えてみるということ、ワークショップ的に、みんなで知恵を寄せ合って考えるということをやれば、これから自分たちが何をしなければいけないかみたいなことが、いろいろ見えてくると思うので、そういうような活動が、博物館の業界でも起きているということをお知らせしておきます。

- 及川議長 ありがとうございます。博物館を社会教育施設と捉えてもいいと思いますが……。
- 林委員代理 そうです。
- 及川議長 社会教育を通したESDというですね。先ほど教育という話が出ましたが、教育というのは、何も学校教育だけではなくて、社会教育、生涯教育があり、つまり、学びということであれば、ここに関わっている、参加している全ての方々は、学びの

活動をやっていると思いますので、そういう視点で、ESDを考える。

もちろん、公教育であれば、それがカリキュラムであるとか、学習手法であるとか、非常に重要視されることは言うまでもないことですが、社会教育であっても、同じようなことが通じる部分があるのではないかということで、広く教育を捉えていく必要が、ESDには求められているんだろうなと思いながら、聞かせていただきました。

今井先生、同じ教育ですけど、高校の方の立場でよろしくお願いします。

- 今井委員 愛知県の豊田東高校の今井と申します。よろしく申し上げます。高校としては、なるべく全国的なとまではいきませんが、ネットワークを張って、各県の高校の取組はお互いに学び合うということは、それぞれで、できる限りでやっています。

本日、愛知県、平成26年度の世界大会以降、平成27、28年度とユネスコスクールの支援会議を立ち上げてまいりましたので、その活動の中から見えてきたことをちょっとだけお話ししたいと思っております。実は、ユネスコスクール支援会議は、学識経験者、企業、団体、ユネスコ協会、学校、行政ということで、川村委員にも入っていただいておりますが、予算化して、講師の派遣、交流会への派遣、ユネスコスクール同士の派遣をしております。あわせて、愛知県の中でのすばらしい取組、地道な取組の発表会、あるいは、コンソーシアムにおける成果発表会を実施しております。年3回、会議を実施する中で、最後に出てきたことは、すばらしい取組を一生懸命やっている。先進的な取組、今、正にユネスコスクールに加盟して、これからという一生懸命やろうという学校もある。その中で、ネットワーク、どこに何があって、どこに、どういう宝があって、それをそこに探り当てるには、どうしたらよいかということで、企業の方も、小中高、NPOも、公民館も協力をしたい、けれど、どうやったらつながるのかが、なかなかうまくいかない。そういうことで、やはりネットワークの大切さが、これからの課題かなという意味で、川村委員もおっしゃいましたけれども、これからのネットワークについては、国の取組にも大変期待しておるところであります。以上です。

- 及川議長 ありがとうございます。そのような意味で、環境省が進められているESD活動支援センターは、正しくそういうネットワークを地域に張るといいますか、構築する、非常によい取組、スキームだろうと期待されますし、もちろん、ESDコンソーシアムも正しくそれを担うものであると思っております。

これで、全員、一応、御発言いただいたでしょうか……。申し訳ありません、塚本委員、国連大学から、よろしくお願いいたします。

- 塚本委員 ありがとうございます。この取りまとめの労をとられたお役所、大変ありがとうございます。全般的に大変満足でございます。国連の立場から、一言、二言だけ申し上げさせていただきたいんですけども、SDGsが、今回、長い議論を経て、全会一致で合意された中で、2つ重要なキーワードがあると考えております。1つは、no one left behind、もう一つは、transformationでございます。transformationは非常に強い言葉が使われています。improvementでも、enhancementでもなくて、transformation。つまり、改革を行わない限り、持続可能性はないということが公表されている。根本的な見直しと根本的な方向性の転換が、今なお求められているということだと思います。

これは、もちろん、既存の社会システムの中でもやっていかなければいけないんですけども、根本的な改革をしようと思えば、教育の果たすべき役割は、もうオンリーワンかもしれません。教育によってしか、根本的な……。考え方を変えなくてはいけないので、できないということなので、SDGsができて、ESDの役割はなお一層高まったという認識を、一つ持っております。さて、no one left behindですけども、これがSDGsでの最大の御旗になっている理由には、今なおbehindな人がいるということです。具体的には、例えば、85%の人たちは、電力、電気を生活の中で使っていますが、15%の人たちは、まだ電気を使えていないという実態があります。また、8人に1人が極度の貧困状態、11人に1人はまだ飢餓状態にある。現在、世界中の11人に1人が飢餓で、1日に食べるものがほとんどない状況になおある。こういうことに取り組もうとしているということが、大きな出発点にもなっております。

今回こうした日本国内の議論を見る中で、大きなSDGsの自分化、自らの問題として取り上げるということは、非常に皆様の努力のせいで、大変成功していると思っております。他方、自分たちと関係ない、そういう世界について、何が必要か、もちろん外務省のODA、関係省庁の海外協力も必要なんです、こうした方々が何を一番求めているかということ、世界から認識されることなんです。自分たちのような立場の人が存在しているということ、まず認識してもらおうということが、出発点になりますので、その意味でも、持続可能な開発の教育ということが、非常に重要な役割を持っていると思っております。以上、ちょっと一言。

○ 及川議長 ありがとうございます。包括的なお話を頂きました。国連の立場で、広い視野が必要だということだと思います。

実は、もっと、もっと皆さんの御意見を聞きたいところですが、所定の時間になってしまいました。今回、なるべく報告は短くということで、事務局の方で最大限努力していただいて、ディスカッションの時間を多くとるということで、議事を構成しておりますが、議長の不手際で、なかなかかみ合わないという御意見もございました。今回の会議の目的は、日本のESDの成果を世界に発信するため、レビューフォーラムと掲げてありますけれども、そういうことで多くの方々のインプットを頂くということでした。

それが、立場や分野を超えて、様々な方からの御意見を頂きながら、みんなで日本のESDをもう一回再構築していくという第一歩であると、考えていただきたいと思います。確かに、それぞれの立場からすれば、もうちょっとこの辺、議論を突っ込んで、主張してほしいとか、もう少し自分のこういう主張を取り入れてほしいなどはあるかと思うのですが、やはりESDは、そういう様々な利害関係者も含めて、みんなで一緒に地球号あるいは日本号に乗って、子供たちの未来を創るための教育を、そのための学びをしていく。それに必要なものがSDGsであり、それを実現するために、educationがあって、ESDがあるんだという形で捉えていただければと思うのです。

やはり、そういうふうなセクター間の障壁があるうちは、日本のESDはまだまだ本物になっていないという気がします。そういう意味で、活動支援センターも重要ですし、我々の円卓会議も重要ですし、今後、様々な省庁の連携も必要になってくると思われまますので、是非そういう広い視点で捉えていただくと有り難いと思います。

最後に、議長が余計なことを言いましたが、そういう観点で、今後とも是非、日本のESDの発展のために、御協力を賜ればと思います。本日はどうもありがとうございました。

16時00分閉会